

地域の人間協働による“いのちのバトンをつなぐ雪見橇”

雪像を造り、ロウソクの火で幻想的に映し出す『雪あかり』。豪雪地帯の特養ホームの入居者が橇に乗って、地域の雪灯りイベントに参加することは、老いを生きる意味を地域の人々と共有する契機となっている。平成6年の冬以降実施されていなかったこの行事の復活に取り組んだ。

岩手県

社会福祉法人

光寿会

〒029-5505 岩手県和賀郡西和賀町湯本30-76-1
TEL: 0197-84-2526 FAX: 0197-82-2802

○法人設立年／昭和52年

○法人実施事業

- ①経営施設数合計：3施設
- ②経営施設・事業【種別毎の数】：
特別養護老人ホーム…1、小規模多機能ホーム…1、住宅型有料老人ホーム…1

○法人の理念・経営方針

光寿苑を『生きる意味』を発見しあえる道場としたい。

- [1] たとえ寝たきりであっても『生きる意味』に何の遜色もないことを発見すべきである。それは、『職員から老人への愛』というだけの人間関係ではなく、老人から職員への心づかい、愛などによって、初めて福祉職員として働いていられることを忘れないことである。
- [2] お世話する者とされる者という関係ではなく、むしろ老人に何かを学ぶという職員、そういう関係でありたい。

○取り組みの法人での位置づけ等

光寿苑家族会合同事業、西和賀町冬のイベント『雪あかり』とのタイアップ事業としての取り組み

○取り組みを実施している施設の概要

【施設名】

光寿苑

【施設種別及び利用定員】

特別養護老人ホーム 入所52床、ショートステイ10床

○活動内容

◇活動開始年：平成元年1月

◇活動の対象者：

特養と小規模多機能のお年寄り、家族会、地域住民、地元若者有志、職員

◇活動の頻度・時間：

年1回……町のイベント『雪あかり』鑑賞を兼ねて3時間ほど

活動実施の背景、実施にいたった理由

始まりは、前苑長が「真冬でも外に出る喜びを感じてもらえたら…」との思いから、地元大工さんの技術をお借りして、この雪見橇（ゆきみそり）ができた。真冬の積雪は2mにも及ぶ現実の中でも、この橇に乗って祭りに出掛けたり、ある日は買い物や散歩に出向いたり…。それは、「どんな苦境でも、お年寄りを喜ばせたい！」という前苑長のあきらめない信念が実を結び、街にとっても一つの冬の風物詩となっていた。

だが、喜び満ち溢れたこのユニークな取り組みも、長くは続かなかった。お年寄りたちの重度化が進み、雪見橇に関わる職員の時間が狭まっていったのだ。お年寄りの家族と職員の手によって実現してきた雪見橇は、平成6年の冬を最後に幕が下りた。その後、介護保険が始まり、世知辛さと合理化の中で汲々とした時間が過ぎていった。そんな中、「福祉に遊び心をもう一度！」と奮起し、雪見橇復活に乗り出した。実に14年ぶりの復活には、家族と職員だけではなく、地元住民との協働をテーマに、再び走り始めたのだった。

実施内容

橇から外を眺められる様に、周囲をアクリル板で囲んだ2人乗り用箱型が2機。車いす一人乗り用が1機。機内には、湯たんぽ20個程を入れて寒さ対策も万全で向き合って座る。お年寄り同士の組があれば、お年寄りご家族との組等々、組み合わせ自由である。コースは、雪あかり会場の一つである湯本温泉の『かまくら会場』と光寿苑の片道600mを往復する。引き手は1機につき最低4人。提灯持ちも含め、橇の周りには、家族と職員、そして地元有志の方を含めた15人程の人間が関わるのだ。

しかし、この復活にはもう一つのドラマがあった。復活から3年間、何とこの雪見橇滑走の日に全く降雪がなかった。くどいようだが、時節は真冬である。除雪技術の精度の良さや温泉街に位置していることが手伝って、全く道路に雪がな



い。そこであきらめるわけもない。雪見櫓復活当時より、毎年『雪道づくり』から祭りは始まるのだ。人の手と重機など使いながら、片道600mの白道が造られていく。ドラマと言える所以は、この大仕事に対して、依頼もしていない湯本温泉の地元住民の方々が積極的に雪道づくりに取り組んで下さる点にある。

この祭りは、この雪道づくりを通して、関わるすべての人間の『心の道』を繋いでいくのだ。

活動効果 (利用者や職員、地域などの反応、影響)

雪見櫓復活から見えてきたもの。それは、湯本温泉の地域住民の皆様が、「お年寄りたちが、この雪景色を来年は見られないかも知れない。」という人生の時間軸の短さを感じつつ、ご協力くださっていることである。だからこそ、今年のこの一回の雪見櫓に寄せる思いは熱い。

その思いを強くさせるものは、雪道づくりから積み上げた心の繋がりにあると確信している。

真冬のこの時期、降雪がないこと自体が稀有なことであり、最初のうちは運がないという感覚でいた。これは試練なのだと… (ちなみに、雪見櫓の翌日には3年間共雪が降った)。ところが、住民の方々が「祭りが元気になれば…」と積極的に雪道づくりを手伝ってくださる。この光景を初めて目にした時、私は思わず涙してしまった。この町の住民は、共に生きているのだと。雪見櫓の成功を確信した瞬間でもあった。

当たり前に降雪があり、自然な積雪の上を滑走できたのなら、ここまでの感動はなかった。

正に、地域住民と家族と職員の協働、そして自然環境の粋な演出による雪見櫓は、『地域で生き抜く』やさしい感性を与え続けてくれている。

今後の課題及び展開

雪あかりとのコラボレーションとしての雪見櫓は、これからも地域の多くの人を巻き込んだ『いのちのバトンをつなぐ雪見櫓』として継承していきたい。また今後は、初代雪見櫓が成し得てきた買い物や散歩に走る『日常の中の雪見櫓』というフットワークの良さも、再発信してみたいと考えている。

そして、当たり前前の日常生活の中に、当たり前前に福祉を感じられる町づくりに繋げていけたらと思う。そのためにも、遊び心から始まった雪見櫓によって、施設が住民生活に近いものになっていけばと考えている。そして、『遊びから命を尊ぶ意味合い』に至るまで一貫しているこの取り組みを、関わるすべての人に五感で感じ分ちあえるように仕掛けていきたい。

尊厳をもち心が通わせられれば、その尊厳に応えようとする生き方をしてくださる。高齢になり認知症になり能力的に落ちてきたとしても、生きる喜びの本質は、さらに耀きを増すのだから。

主な経費や財源及び人員等

(年間あたり)

主な経費	経費概算額	主な財源	財源概算額
チラシ作成・配布等	1,000円	施設行事費	11,000円
協力団体謝礼等	10,000円		円
櫓製作費(平成元年のみ)	(190,000円)		円
櫓修繕費(平成18年のみ)	(62,000円)		円
<櫓製作等合計>	(252,000円)		円
<合計>	11,000円	<合計>	11,000円

・取り組みに係わった職員数 14名
(職種等：苑長、副苑長、在宅課長、生活課長、事務課長補佐、看護主任、介護主任、栄養士、介護支援専門員、介護職員(行事委員)数名、事務職員数名など)